

発行：2010年10月20日/発行責任者：特定非営利活動法人 シャンティ山口 代表 角 直 彦
連絡先事務局 〒753-0215 山口市大内矢田 717 佐伯昭夫 電話/Fax 083-927-4083
ホームページアドレス：<http://www.shanti-yamaguchi.com/>

読売新聞掲載記事 平成22年10月18日(月)

13S 西部 22

ラオス国境に近いタイ北部の山あいにあるホイナム村。赤土に降ったスコールを、強烈な日差しが瞬く間に乾かしていく。50戸、3000人の集落から歩いて30分、山の斜面には、トウモロコシ畑がびっしりと広がる。険しい道を上りながら、山口県のNPO「シャンティ山口」(角直彦代表理事)の事務局長、佐伯昭夫さん(69)は思った。最近、村の風景が変わってきた。

*

山口NPO タイで活動17年

取り組んでいる。佐伯さんは、草取りや小屋作りなどの大工仕事まで引き受け、村民を支えている。現地の活動を会の発足時から支えるのは、村民と同じモン族のジッポン・セイヤンさん(42)。1歳の頃、メコン川を父母といかだで渡ってきたラオス難民だ。バンコク近くの寺に住み込み、農業専門学校を出て日本語も学んだ。「学校を卒業したら同じモン族と働いて助けたいと思っていた。この仕事は好きだしやりがいがある」

*

現地スタッフはほかに3人

農村支援「笑顔のために」

タイには、ラオスやミャンマーに近い山岳地帯に、多くの少数民族が生活している。その中には、政府の移住政策などによって平地に移り住んだ民族もいるが、代々の土地を離れず、伝統的な農村の生活様式を維持している民族が多い。彼らにほぼ共通するのは、近代的なインフラが整わないまま、貧しい暮らしを強いられていることだ。首都バンコクと山岳の農村

貧しい山岳民族

地帯とでは、同じ国とは思えないほどの経済格差がある。SVA山口県支部は、80

いるが、全員がモン族。うち2人は会が運営した学生寮の卒業生だ。支えられた経験は、支える側に回ることでよくな生かされている。改革の成果は、十数年来

たないと定着しないだろうが、佐伯さんは、継続して見守り続けるつもりだ。農家に育った佐伯さんの目には、タイの質素だが温かい農村の風景は懐かしいものに映る。

「山口ならではの古くからの技術や農業の経験を生かせる」日本の若者にも、協力の輪は広がっている。山口県立大4年の坪谷純希さん(22)は8

月末、2回目の現地ツアーに参加した。「金銭的な支援ではない、システムを教えるやり方が

*

村の変化―それは、自給自足の稲や果物だけを育て、守ってきた山の姿が失われたこと。海外の大企業が、バイオエタノールに使うトウモロコシ栽培を勧めたためだ。大量の農薬を買うために人々は借金を背負った。農薬による健康被害さえも出てきた。「このままでは村の美しい自然や生活が減じる。子供たちの将来が危ない」。佐伯さんは恐れた。

1970年代後半、テレビで見たベトナムのポトピープルの映像が、ずっと頭を離れなかった。シャンティ山口の前身である曹洞宗ボランティア会(SVA)による、カンボジア難民支援に共感して活動に加わった。県庁を退職後は中心的存在となり、気がつけば一年の半分はタイで暮らすほどになった。

複数の作物を有機栽培する農法に転換するため、研究農場として約5000平方メートルを借り、今年から整備を始めた。国営の農園に村民を派遣し、栽培に適した作物の研究にも



トウモロコシ畑で作業するホイブム村の人
農作業小屋の建築を手伝う佐伯さん(左)



加した。「金銭的な支援ではない、システムを教えるやり方がいい。現地の人とタッフと一緒に作り上げていくやり方にも感心しました。彼は、国際協力NGOへの就職を目指している。

「いつかは彼らに任せて手を引くのが目標なんです。見返りを求めるとしたら、みんなの笑顔」。佐伯さんはそう言って目を細めた。

(文と写真||小笠原瞳)



—環境衛生活動募金にご協力をお願いします。—

2010.10.20saeki